

村上地域における生活習慣の地域差：村上コホート研究

新潟医療福祉大学健康栄養学科 斎藤トシ子
 理学療学科 小林量作
 新潟リハビリテーション大学 押木利英子
 新潟大学大学院医歯学総合研究科 中村和利

【背景・目的】

日本人の平均寿命は世界でトップクラスとなる一方、高齢化が加速している。2013年の老年人口割合は25.1%となり、2055年には40.5%とほぼ倍増すると予想されている（国民衛生の動向2014/2015）。高齢者における加齢性疾患や身体機能低下・要介護状態は個人の日常生活動作（ADL）や生活の質（QOL）の低下を来すと共に、医療・介護費の急激な増加として社会に甚大な負担を強いる。

このような背景から、発表者らは加齢性疾患のリスク要因を包括的に明らかにする大規模コホート研究（村上コホート研究）を開始し、2013年にベースライン調査を完了した。ベースライン調査では、詳細な生活習慣情報を得ており、今回は主要な生活習慣の地域差について報告する。



【方法】

2011年1月から2013年3月に新潟県北部の村上保健所管内3市村（村上市、関川村、粟島浦村）の40～74歳の全住民34,802人を対象に参加者を募り、14,370人が参加した。自記式調査票により性、年齢、身長、体重、食習慣（半定量的食物摂取頻度調査法 Ishihara J, et al. J Epidemiol 2006; 16: 107-16 による）、運動量（METs/w）、嗜好品などの情報を得た。

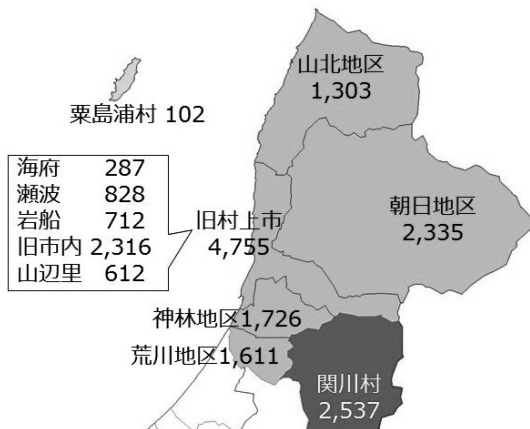


図1 村上市、関川村、粟島浦村の参加者数

地域比較を行うにあたり、村上市を山北地区、朝日地区、旧村上市、神林地区、荒川地区に分けた。旧村上市は人口が

多いため、さらに海岸部の3つの地区（海府地区・瀬波地区・岩船地区）、内陸の山辺里地区、および旧市内に分けた（図1）。本研究計画は新潟医療福祉大学倫理委員会の承諾を得た。

【結果・考察】

対象者の平均年齢は、山北地区59.9歳、海府地区62.0歳、瀬波地区58.1歳、岩船地区59.4歳、旧市内59.8歳、山辺里地区57.5歳、朝日地区59.0歳、神林地区58.5歳、荒川地区60.1歳、関川村58.1歳、粟島62.0歳であった。

運動量（METs）に関しては、市街地（旧市内、瀬波地区、岩船地区）で少なく、その他の郊外の地区で多い傾向が見られた（図2）。体格の指標であるBMIについては、女性において市街地で低い傾向が見られたが、男性では明らかではなかった（図3）。

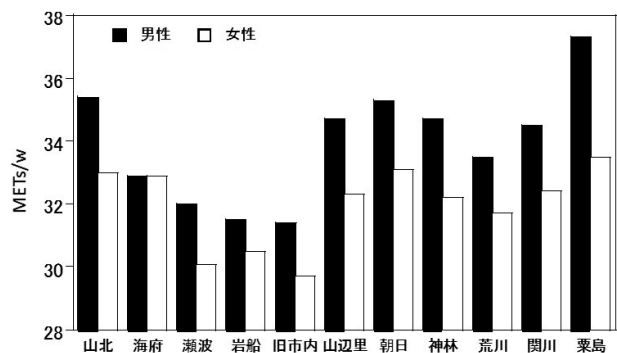


図2 運動量(1週間あたりのMETsの合計)の地域差

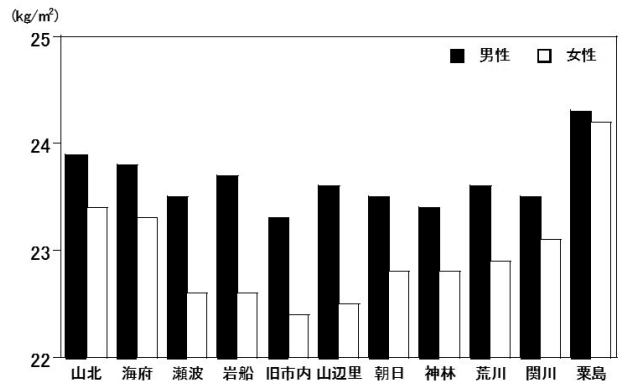


図3 BMIの地域差

概して、市街地の住民は運動量が少なく、痩せている傾向がある。喫煙、飲酒に関しては、地域差は明らかではなかったが、塩分摂取量は市街地で少ない傾向にあった。村上市はお茶の産地である。緑茶摂取量は市街地（旧市内、瀬波地区、岩船地区）および海府地区でより多い傾向にあった。

【結論】一地域においても、がんや循環器疾患に関連する生活習慣の地域差が見られ、疾病予防対策において地域差を考慮する必要が示唆された。食習慣の地域差も解析したい。

【謝辞】本研究は日本学術振興会の学術研究助成基金助成金及び新潟医療福祉大学外部資金獲得奨励金によるものである。